

2026年8月号 VOL.94

軽音楽部マガジン

発行：特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会

配布：全国 2,140 校の高等学校軽音楽部

表紙のコンセプト

ひとつの光の中にも、無数の色が
存在するように、ひとつのステー
ジの中にも、無数の学びと成長が
存在している

軽音楽コンテストは 勝敗を決める場ではない

軽音楽部の本質が問われる
夏のコンテスト

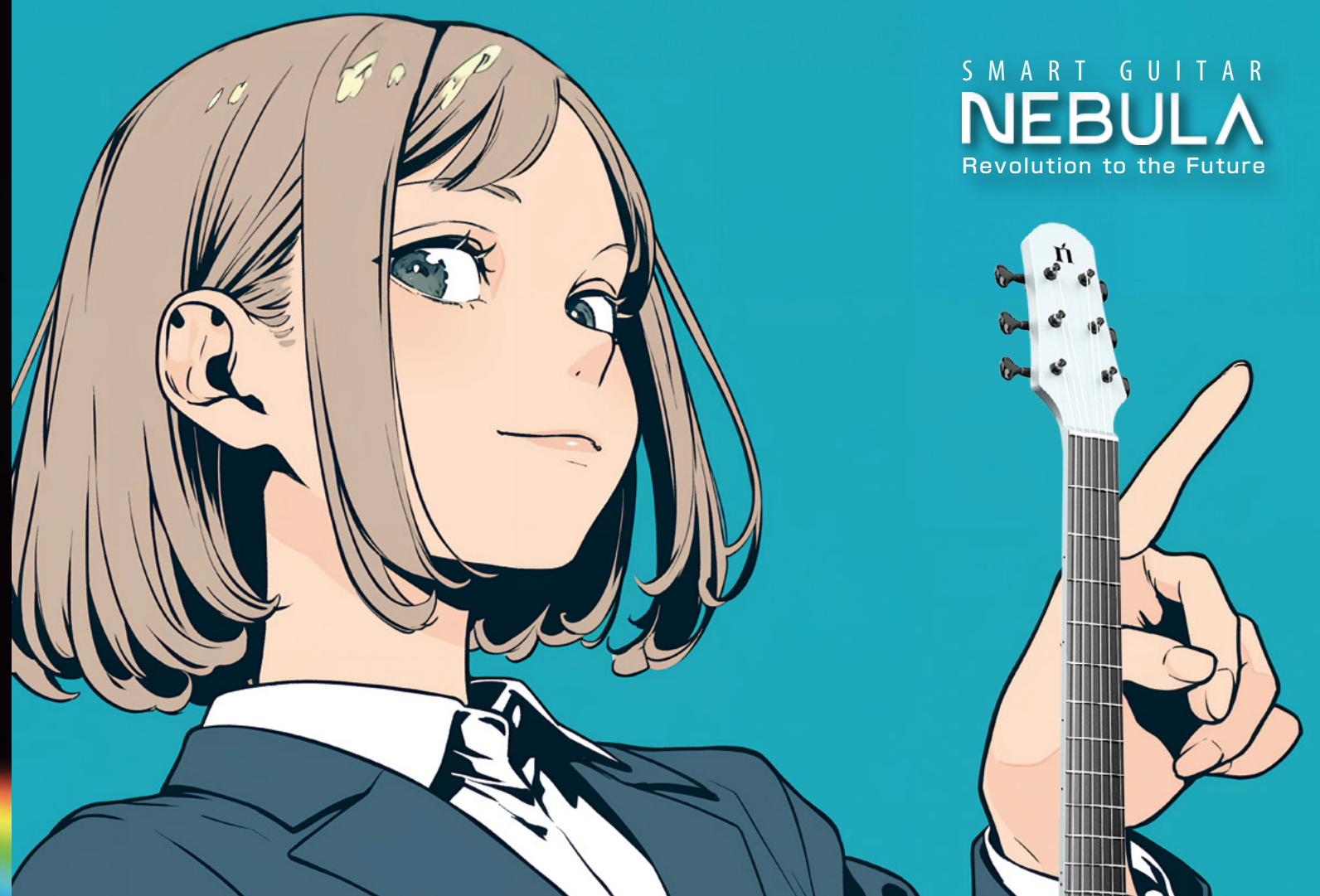
「他者の批評ができる力」を
持つことが成長のカギ

多様な才能を育む評価基準とは…



軽音楽部マガジン
バックナンバー

SMART GUITAR
NEBULA
Revolution to the Future



ヘッドフォンで演奏が楽しめる スピーカー、エフェクト内蔵の SMART なギター

アンプへの接続はもちろん、ヘッドフォン端子やスピーカーを内蔵。軽くて丈夫なカーボンファイバーを本体に採用し、多彩な音作りを実現するエフェクターやチューナー、メトロノーム、ルーパーを搭載。いつでもどこでも「弾きたい！」と思った瞬間に演奏できる、スマートなギターです。

- 1 スピーカー搭載で、面倒な準備をスキップ
- 2 ヘッドフォンを接続すれば、夜間の演奏も◎
- 3 ワンタッチでエフェクトが切り替わる
- 4 豊富なエフェクト群を自由にカスタマイズ
- 5 演奏をサポートしてくれる様々な便利機能
- 6 USB Type-C 対応でギターの録音が簡単に
- 7 高温多湿に強く、軽量のカーボン素材
- 8 丈夫で使いやすい高機能なギグバッグ付属



**Summer
セール開催中！**



詳しくはこちら <https://1010digital.thebase.in/>

全国約4,800校の 高校に軽音楽部を！

※現在、軽音楽部があるのは**2,140校**です（令和8年4月1日当協会調べ）

軽音楽部の諸活動を通して若者の成長を応援しています

1 軽音楽部の正しい理解を

軽音楽部は部活動としての歴史が浅く、ポピュラーミュージックやバンドへの偏見も一部に残っており、正しく理解されていないのが実状です。STEAM教育の一端として、軽音楽を通じた部活動の有意義さや得られるものなどを学校内外へ広めていきます。

2 軽音楽部の全国普及に向けて

学校教育の一環である部活動のひとつとして、軽音楽部が全国の学校に設立されることを目指し、日々の練習や演奏会のサポート、楽器や機材の相談、各種クリニックや大会の開催など、諸活動をバックアップしていきます。

3 新しい活動の提案と支援

デジタル化、IoT化による現代的な楽器や機材、DTMの普及による新しい軽音楽のスタイルなど、今と未来に見合った活動を各業界とのパイプ役として軽音楽部に提案、支援しつつ、軽音楽のポップカルチャーとしての発展を目指します。

特定非営利活動法人
全国学校軽音楽部協会
keionkyo.org



軽音楽部マガジン

令和8年8月号 VOL.94

■軽音楽部マガジン VOL.94 ■創刊：平成25年12月18日（水）■第15巻5号通巻94号
■監修・発行／特定非営利活動法人（NPO法人）全国学校軽音楽部協会 JASLMC（Japan Association of School Light Music Club）
〒224-0003 横浜市中区中川中央 1-37-6-405 TEL：045-913-0901 FAX：045-913-1900 E-Mail：info@keionkyo.org
■企画・編集／株式会社未常識

From Chief-In-Editor

「趣味の延長」から「教育としての団体行動」へ

夏の到来とともに、各地で様々な演奏会やコンテストが開催される季節となりました。生徒たちが日頃の成果を披露すべく熱を帯びる一方で、今一度「部活動は学校教育の一環である」という足元を見直す必要があると思います。昨今、民間企業主導の華やかなコンテストが林立しています。一見すると活動の場が広がったように感じますが、これは「部活動としての軽音楽部」の在り方を曖昧にする逆風、逆行の側面も内包しています。なぜなら、それらの多くは「演奏技術の優劣」や「エンターテインメントとしての見栄え」を評価する場になりがちだからです。こうした外的な要因に振り回され、「ただ楽しく演奏できれば良い」「技術さえ高ければルールや規律は二の次」という風潮が生まれ得ることに警鐘を鳴らさざるを得ません。

「演奏がうまくなりたい」という生徒個人の情熱は、本来尊いものです。しかし、そのベクトルがバンド全体の調和ではなく、自己満足や個人のエゴの追求に向いてしまった瞬間、部活動としての「団体行動」は崩壊していきます。それはもはや、学校で取り組むべき部活動ではなく、単なる「趣味の個人レッスン」の延長に過ぎません。残念なことに、指導すべき顧問自身がプレイヤー気分の「趣味の延長」のまま、この境界線を混同している行動も散見されます。顧問のコーチングの真髄とは、生徒の「うまくなりたい」という個人のエゴをバンド全体「アンサンブル（調和の美しさ）」へと導き、組織としてのあるべき行動を学ぶことにあるのではないのでしょうか。指導者が生徒と同じ目線で趣味の音楽を楽しんでいるだけでは、教育的要素は失われてしまいがちです。既存曲のコピーからの脱却を目指し、「オリジナル楽曲制作」はまさに「無から有を生むこと」を学ぶための教育的活動です。当協会が主催する「オリジナルソング・グランプリ」の優秀作品を今月末に公開します。正解のない音楽に対して、どのようにメンバー間で対話を重ね、1つの「調和」へと昇華させたのか。既存曲の模倣（コピー）を超えた先にあるそのプロセスを、ぜひ多くの生徒の刺激にしたいかと思います。

一方で、現在の教育現場において、コンテストや演奏会への参加を尻込みする生徒が少なくないことも事実です。「自信がないから挑戦しない」と言う生徒を前に、顧問の先生方は生徒の繊細な心情を慮るあまり、それ以上強く背中を押せないという、難しくももどかしい関係性が見受けられます。「時代が変わった」と片付けるのは容易ですが、生徒の現状の感情に寄り添い、現状維持を黙認するだけでは趣味のサークルと同じです。自信とは、最初から持っているものではなく、困難やプレッシャーという「壁」を乗り越え、やり遂げた先にしか生まれません。だからこそ、まだ自信を持てずにいる生徒に対して、「君たちなら越えられる」と無限の可能性を信じ、時に毅然と、時に熱く鼓舞して挑戦の場へ発奮させることこそが、教員に求められる本来の姿ではないでしょうか。大会への挑戦を「個人の気分の問題」にしてしまえば、組織としての団体行動は成立しません。一人の「自信がない」という声で全体の足を止めるのではなく、仲間と手を取り合ってプレッシャーに向き合わせる。その産みの苦しみを経験させることこそが、指導者の果たすべき教育的役割ではないのでしょうか。

明確な勝敗が存在する運動部と違い、音楽には絶対的な優劣がありません。しかし、だからこそ軽音楽部には運動部とは違い、誰もが優秀、誰もが一番という、相手を否定しない競争への挑戦が可能になります。勝ち負けという目に見える結果がないからこそ、自分自身の限界に挑む「自己への挑戦」であり、仲間と共に正解のない美しさを追い求める「団体での挑戦」が必要とされるからです。軽音楽部を単なる「趣味のバンドの集まり」で終わらせるか、それとも「次代の社会を生き抜く人間を育てる教育の場」へと高めるか。それは一重に、顧問の先生方が教育者としての軸を毅然と保ち、生徒を鼓舞し続けられるかどうかにかかっていると思います。

特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会 理事長 三谷佳之

軽音楽部は学びの宝庫

軽音楽コンテストは勝敗を決める場ではない

三谷佳之

特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会
理事長

軽音楽コンテスト（大会）は、軽音楽部に所属する高校生たちにとって、日頃の練習の成果を発表する大切な舞台です。しかし、このコンテストは単に演奏の優劣を競うだけの場所ではありません。いつも私たちは「部活動を通して育まれる人間性」という、より深いテーマを大切にしています。なぜなら、音楽や芸術というものはスポーツのように明確な数字で優劣を決められるものではないからです。

音楽に「一番」を決められない理由

スポーツはタイムや点数、ゴール数などの数字で「勝った」「負けた」がはっきりとわかります。しかし、音楽や芸術は少し異なります。

例えば、レオナルド・ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」（1503年～1506年頃）、フェルメールの「真珠の耳飾りの少女」（1665年頃）、ピカソの「ドラ・マールの肖像」（1937年）。この3つの絵のうち、「どれ

が一番素晴らしいか？」と聞かれても、答えを出すのは難しいでしょう。それぞれに異なる良さがあり、その価値は人によって、時代によっても変わるからです。音楽も同様で、聴く人の心にどう響くかが大切であり、たった1つの基準だけで「良い」「悪い」は決められません。

この考え方は私たちがコンテストを運営する上での一番のこだわりです。審査員も、ただ技術が優れているかどうかだけでなく、バンドの個性や表現力、そして、会場をどんな雰囲気にしたかなど、多角的な視点から評価しています。

しかし、学校教育の一環として考えると、自分自身の今の立ち位置を知るための「物差し」も必要です。そのため、コンテストでは順位をつけていますが、これは、あくまで「あなたの今の実力はこのあたりです」という目安であり、今後の目標を見つけるためのヒントとして捉えていただきたいのです。順位という結果だけでなく、審査員からのアドバイスや他のバンドの演奏から学ぶことこそ、

皆さんの成長にとって何よりも価値のあることだと考えています。

審査の物差し、バンドの「アンサンブル」

では、私たちはこの「物差し」として、何に着目しているのでしょうか。音楽に「一番」を決められないからこそ、私たちは順位をつける際に「バンドのアンサンブル」という基準に着目しています。

私たちのコンテストでは、既存曲のコピーでも、オリジナル曲でも出場することができます。「コピーよりもオリジナルの方が上位である」という意見をよく耳にしますが、それは絵画に例えると、理解しやすいかもしれません。

有名な画家が描いた絵画を寸分違わぬようにコピーする、つまり、贋作作りにはとても高度な技術が必要になります。一方、オリジナルの絵画なら誰でも描くことができます。もちろん作画技術の優劣はありますが、コピーと言えども、真

贋が問われるレベルの贋作ともなれば、高い技術が必要になるのです。そういうこともあるので、私たちは楽曲やアレンジの良し悪しには踏み込まない方針で、当日のアンサンブルの出来栄で評価しています。

「アンサンブル」とは、一人ひとりの演奏技術はもちろんのこと、リズムの一体感、音量のバランス、そして、お互いの音を聴き合いながら演奏するコミュニケーション能力など、バンドとしての一体感を示すものです。このアンサンブルの質こそが、聴衆の心に届く演奏を生み出す鍵だと考えています。

コンテストが育む、これからの時代に必要な力

部活動は単に楽器が上達するだけの場所ではありません。軽音楽部のメンバーはバンドという小さなチームの中で、協調性やコミュニケーション能力を育んでいきます。1つの楽曲を完成させるまでには、メ

ンバーそれぞれの意見を尊重し、時にはぶつかり合いながらも、1つの音楽を作り上げていくプロセスが不可欠です。

このプロセスは勝ち負けにこだわるスポーツ競技とは少し違う側面を持っています。もちろん練習の成果としての演奏技術は大切ですが、それ以上に仲間と協力して困難を乗り越える力、そして「どうしたらもっと良くなるだろう？」と自分で考えて行動する力が求められます。

そのため、顧問の先生に求められる指導も、技術を教える「ティーチング」よりも、生徒たちが自ら答えを見つけられるように手助けする「コーチング」が重要になってくると考えています。

コーチングの本質とは、答えを教えるのではなく、「問いかけ」を通じて、生徒自身に気づきを促すことにあります。例えば、単に「ここはもっと速く弾こう」と指示するのではなく、「この曲のクライマックスをもっと聴いている人に強く印象付けるにはどうしたら良いと思う？」と問いかけることで、生徒は自らの演奏を客観的に見つめ直し、表現の可能性を自発的に探求し始めます。

顧問に求められる「褒める」の力

ただ闇雲に「上手だね」と褒めるだけでは、生徒の成長は限定的かもしれません。コーチングにおいては「承認（Acknowledge）」というアプローチが鍵となります。これは単に良い結果を褒めるのではなく、その結果に至るまでのプ

ロセスや努力を具体的に言葉にして認めることです。「何度も練習していた右手の動きが滑らかになっていたね」といったように、具体的な努力を指摘することで、生徒は「自分の努力は正しかったんだ」という自信を得て、次なる挑戦への意欲を高めます。

このように、コーチングは生徒の内側から湧き出る力を引き出し、自律的な成長を促すことを目指します。唯一の正解がないと言われる今の時代に、軽音楽部は自分で考え、創造する力を育むのに最適な場所と言えるでしょう。

結果よりもプロセス、演奏者だけでなく観覧者も学ぶ

コンテストでの結果そのものに一喜一憂するのではなく、同世代の高校生と同じステージに立つことで、お互いに学び合って欲しいと私たちは願っています。同じ条件で演奏するからこそ、学べることは山のようにあります。

ステージに立つ前の控室での立ち居振る舞い、楽器やエフェクターからシールドケーブル、電源ケーブルなどの整備や取り扱い、個人の音出しからバンド全体のサウンドチェックの仕方、ステージでの目配せに至るまで、学べることは無数にあります。それこそ、他者から学ぶ姿勢であり、ステージで演奏をしないまでも、応援に来ている他の生徒も学べるポイントだと考えています。

よくあるのは、大勢の部員を抱えている部活動にもかかわらず、ステージで演

奏するバンドの生徒だけが会場に来ている様子を見かけることです。これは非常にもったいないことだと言わざるを得ません。なぜなら、他県の高校の、知らないバンドの、ステージに向かう真剣な姿勢を学べる、またとない機会を逃しているからです。会場に足を運び、ステージを見ているだけでも多くのことを学べます。

コンテストの真の価値

私たちは、このコンテストが「優勝至上主義」に陥ることなく、結果よりもそこに至るプロセスと、演奏者だけでなく観覧者も学べる場となることを目指しています。

入賞という結果だけに囚われるのではなく、「あのバンドのドラマーは、演奏中にメンバーとアイコンタクトをしつかりと取っていたな」とか、「あの高校のサウンドチェックの仕方がすごく勉強になった」というような、具体的な学びを持ち帰って欲しいのです。そうした気づきこそが、順位という表面的な結果よりも皆さんの成長にとって大きな財産となるはずです。

軽音楽部のコンテストは演奏技術を競い合う場であると同時に、音楽や芸術の価値、そして、部活動の真の意味を深く考えるきっかけをくれる場所です。私たちは、このコンテストを通して、皆さんが単なる演奏家としてだけでなく、一人の人間として大きく成長できるように、これからお手伝いしていきたいと考えています。



パブロ・ピカソ「ドラ・マールの肖像」
1937年



ヨハネス・フェルメール「真珠の耳飾りの少女」
1665年頃



レオナルド・ダ・ヴィンチ「モナ・リザ」
1503年～1506年頃

コンテストは成長の糧

軽音楽部の本質が問われる夏のコンテスト

三谷佳之

特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会
理事長

これから夏休みを迎え、全国各地で専門部／連盟主催や民間主催の軽音楽コンテストが数多く開催される時期となります。日頃の練習の成果を発表する場として、また、部員たちのモチベーションを高める機会として、これらのコンテストには一定の意義や賛否があります。そこで、この時期だからこそ、今一度、学校教育の一環としての軽音楽部の「本質」について考えたいと思います。

コンテストは部員たちが目標を設定し、それに向かって努力する原動力となり得ます。しかし、とすれば、「勝利至上主義」に陥り、本来の教育的価値を見失ってしまうケースも散見されるのが現状です。芸術や音楽に絶対的な優劣をつけることの難しさを認識しつつ、部活動はプロのミュージシャンを養成する機関でも、登竜門でもありません。学校教育における部活動とは、単に演奏技術や作曲技術の向上のみを目的とするものではないと思います。仲間と共に試行錯誤し、多様

な意見を交わし、活動の幅や内容を自らの手で作り上げていく過程にこそ、その真の価値があります。残念ながら、現状の軽音楽部の活動においては、こうした教育的視点が見落とされ、コンテストでの結果ばかりが重視されるケースもあると耳にします。そこで本稿では、コンテストの位置づけを再考し、日々の部活動にこそ意味があるという視点を持って指導する際のいくつかの視点を提示したいと思います。

1

コンテスト選定の羅針盤

…教育の場としての部活動

夏休みを控えて、数多くの軽音楽コンテストが開催の準備を進めています。この時期、顧問の先生方は、部活動の活動範囲に相応しいコンテストであるかどうかを慎重に見極める必要があるかと思っています。一口に「コンテスト」と言っ

ても、その趣旨は多岐に渡ります。中には、未来のアーティストを発掘するオーディション的な要素が強く、プロのミュージシャンを目指すエンターテイメント性に特化したコンテストも存在します。こうしたコンテストは、一見すると華やかで、部員たちの期待を刺激するかもしれません。が、その根底に学校教育という基盤があるのかどうか、検討の余地が残ります。一概には言えませんが、エンターテイメントが前面に出過ぎているコンテストは、往々にして教育的な配慮が希薄になりがちです。

一方で、専門部／連盟や当協会が主催するコンテストは教育をベースに据えています。これらのコンテストは派手さに欠けるかもしれませんが、部員たちの成長を促すための教育的な視点が随所に盛り込まれていると思います。顧問の先生方は、生徒が持ち込んだコンテストに無制限で応募せず、そのコンテストがどのような趣旨のものであり、普段の指導方針、そして、何よりも学校教育の一

せん。部活動の目的を見失うことなく、参加するコンテストを適切に選ぶことが、これからの軽音楽部の健全な発展には不可欠であると思います。

2

芸術に優劣なし

…プロセスに宿る教育的価値

そもそも芸術や音楽に明確な優劣をつけることは極めて困難であり、ある意味でナンセンスであると思います。音楽は聴く人によって感じ方が異なり、同じ人であっても、その日の気分や体調によって受け止め方が変わる、極めて感性の強いものです。そのような領域において、順位をつけることに、どれほどの教育的意味があるのでしょうか。もちろんコンテストという形式を取る以上、どうしても優劣はついてしまいます。しかし、重要なことは、その「優劣」に一喜一憂することではなく、その過程から何を学び、何を次へとつなげていくかという点にあると思います。

生徒たちに順位付けの相対性を理解させ、結果のみに囚われない姿勢を伝えることが大切です。コンテストは、例えるなら「腕試し」のような感覚で臨むことが望ましいと思います。日頃の練習の成果を出し切り、自分たちの音楽を表現する場として捉え、その結果を楽しむくらいの気持ちでいることが、心の健康にもつながるものと認識しています。そして、何よりも重要なのは、そのコンテストに

臨むまでの「プロセス」にこそ、軽音楽部の活動の真の教育的価値が宿っているのではないのでしょうか。

当協会では、軽音楽部の特徴として、コミュニケーション、クリエイティビティ、そして、チームワークの3つを挙げています。コンテストに向けてバンドメンバーで楽曲を作り上げる過程では、活発なコミュニケーションが不可欠です。オリジナル曲であれば、それぞれのアイデアを出し合い、試行錯誤しながら創造性を高めていきます。コピー曲であつても、自分たちらしいアレンジを加えたり、解釈を深めたりすることで、創造性を発揮することが出来ます。そして、それぞれのパートで地道な練習に励み、全体として調和の取れた演奏を目指すことこそ、まさにチームワークの結晶だと考えられます。これらの要素が密接に絡み合い、1つの音楽を作り上げていく過程こそが、部員たちの人間的な成長を促す貴重な経験になるものと思います。したがって、コンテストにおける勝ち負けという表面的な結果よりも、コンテストに臨むまでのプロセスの過程で培われるコミュニケーション能力、創造性、そして、チームワークこそが、生徒たちの成長を大きく促すと考えています。ここに、学校教育の一環としての部活動の存在意義が示されるものと思います。生徒たちが主体的に考え、行動し、仲間と協力して困難を乗り越える経験は音楽的な技術の向上に留まらず、社会で生き抜くための汎用的な能力を育むことにつながるでしょう。顧問の先生方には日々の練習の中で、こ

のプロセスに焦点を当て、生徒たちが自ら考え、行動できるような指導Ⅱコーチングを期待しています。

3

コンテストは

「終わり」ではなく「始まり」

…教育的評価の視点

教育的視点から軽音楽部のコンテストを捉え直すと、大会当日の結果発表、つまり、審査発表があつてからが、実は最も重要なフェーズであると思います。一般的には、コンテストの審査発表ですべてが終わった…と思われがちです。しかし、教育的な観点から見れば、審査発表は決して「ゴール」ではなく、むしろ新たな「スタート」だと思えます。専門家である審査員の方々から見た自分たちの演奏が、どのように評価されたのか。入賞できなかった場合、それはどのような理由によるものだったのか。生徒たち自身がこれらの評価をどのように受け止め、分析するかが極めて重要です。その分析結果を明日からの活動や練習にどう活かしていくかを考えるきっかけとすることが大切と言えます。また、大会を通して、同じ年齢の他校の生徒たちの演奏を耳にしたばかりであるからこそ、彼らと比較して自分たちが勝っている点、あるいは足りない点はどこなのかを具体的に考え、今後の活動につなげることが大切ではないでしょうか。つまり、コンテストは審査発表で終わるのではなく、審査発表か

らのスタートであるという捉え方こそが、教育的に望ましいと言えます。

コンテストがエンターテイメント性や勝利至上主義に強く傾倒していると、審査発表は「ゴール」であり、そこですべてが終了してしまいます。しかし、教育的な視点に立てば、審査発表は「始まり」です。得られた評価や気づきを糧に、次なるステップへと踏み出すための出発点となるべきであると思います。例えば、審査発表後、生徒たちに「今の演奏で、一番良かったと思うところはどこでしたか?」「もしもう一度演奏できるとしたら、どこを工夫しますか?」といった問いかけをする方法もあるでしょう。あるいは「他のバンドの演奏で、自分たちのバンドに取り入れたいと思ったことは何でしたか?」など、具体的な視点を与えることで、生徒たちは自然と内省し、次へとつながる思考を始めることになるのではないのでしょうか。

このように、結果を単なる勝ち負けとして終わらせるのではなく、学びの機会として最大限に活用することこそが、軽音楽部の活動の教育的価値を高めることにつながるものだと考えます。軽音楽部は生徒たちが自ら音楽を創り、表現し、仲間と協力して1つの目標に向かう、類まれな教育の場です。この貴重な機会を最大限に活かすことが、部活動の真の意義につながると思います。

今年の夏のコンテストの審査発表の後、あちらこちらで生徒の自主的な反省会やお互いに振り返る様子が見られることに期待したいと思っています。

「他者の批評ができる力」を 持つことが成長のカギ

自分の良いところや改善すべきところを自分で判断できることも大事ですが、客観的な意見をもらうことや他者を批評する力を持つことも成長には欠かせません。部活動は、互いに演奏をチェックし合える絶好の環境です。部内で演奏を見せ合って批評し合ったり、大会などで他校や他県のバンドの演奏を見て研究する機会を作りましょう。

人の振り見て…

何かを体得していくためには「経験」が欠かせません。教科の学習も、できるだけ多くの「勉強」「試験」といった経験をしたりの方がその内容がよく身につきます。音楽や楽器演奏も同様に、大事なものは「練習」「本番」といった経験ですが、部活動で行っていることに割ける時間は限られています。そこで重要となってくるのが、思考を内側だけではなく外側にも向けて周りをよく観察することです。

野球選手でもアイドルでも、誰か憧れる人ができると、その人のようになりた

いと真似をし始めます。すべての習得は模倣から始まり、その探求への努力は苦労とは感じないため吸収力はゲンと高まります。インターネットが発達した現代、簡単に古今東西の無数の音楽に触れることができますが、言い方を変えれば無料動画サイトやサブスクが当たり前の情報過多な状況です。メニューの多い飲食店ののように、その中からお気に入りを探すのは簡単なことではありません。これぞ！という憧れの存在に出会えた人はラッキーともいえ、さらにその中から今風の言葉で「ハマる」「沼る」ほど夢中になれるアーティストやミュージシャンを見つけることは奇跡に近いかもしれません。

とはいえ、より多くの音楽や演奏に触れることは、見識を広める経験をする上でもとても大事なことです。温故知新、知見を得ることこそ、直接的な練習の他にすべき行動です。また、「他山の石」「人の振り見て我が振り直せ」ということわざのように、他者の行動から自分を振り返ったり、自分と誰かを比べて様々な感情持つことも、成長への良いきっかけとなります。

部内で相互講評をする

個人練習でもバンド練習でも、演奏している自分（あるいは自分たち）が本当は一番その良し悪しが見えていない場合もあります。自分たちの演奏を客観的に判断する最も簡単な方法は演奏を録音・録画してみることで、聴き返してもミスばかりが気になって的確な改善点や伸ばすべき良いところに気づけないことも多いものです。

また、個人練習の方法はインターネットで見つけることができるかもしれませんが、アンサンブルに関して、さらに言えば今ここで演奏した自分たちへの適切なアドバイスがもらえることはありません。軽音楽部で客観的なチェックを行ってくれるのはコーチ（指導員）、あるいは学校によっては顧問の先生も良いアドバイザーになってくれるかもしれません。そういった指導者がいない学校ではクリニックや大会などに参加して外部の人から講評をもらうしかありません。しかし、そんな機会は稀です。

批評ポイントはテクニック以外

批評のためにチェックすべきことは、初心者バンドでも上級生のハイレベルバンドでも実はあまり変わりません。技術的な批評を無理にする必要はなく、バンド演奏に対しての向き合い方やアンサンブル上の役割をそれぞれのパートがきちんと行えているかがメインです。ちなみに、それは大会においても重要な審査ポイントとなります。

そして、部活動としての規範が守られ

それらの問題を解決するために、一定の人数がいればどんな軽音楽部でもできる最も有効な手段が、部員同士で互いに批評したりアドバイスし合うことです。初めは先輩が後輩に…という形だけでも良いと思います。とにかく、互いの演奏を見せ合っ意見交換する、感想を言い合う機会を作ることに大きなメリットがあります。先輩が下級生の演奏を批評したりアドバイスすることは、自分が普段やっていることを見つめ直す良いきっかけになります。それに、そもそも先輩が後輩にアドバイスしてあげるのは部活動の基本です。一方で、先輩が先輩のプレイを批評しようとして一生懸命に観察することも、その後の成長につながります。どちらにしても、他者への批評が自分の耳を鍛え知識を増やしていくこととなります。専門的なことがわからないという人でも、少なくとも自分のパートのことは互いに意見したり質問し合うことはできるのでないでしょうか。



ているかも知れない大きなポイントです。演奏に臨む姿勢や態度、準備にかかる時間、セッティング、楽器&機材の扱い方、挨拶、メンバー間の関係性…など、軽音楽部という部活動として、また集団行動としての責任感や社会性についてチェックし合うだけでもその意味は十分にあります。全国の学校の中には、大会や演奏会などに出演するバンドの選抜を部員同士の批評会で決めているという学校もあります。部員同士の決定であれば、選抜に遺恨も残りにくいのではないのでしょうか。

それでも他者への批評などは言いづらい、気兼ねしてしまうとい

う意見が多い場合は、無記名でコメント用紙を書き合せて代表者が発表するといった方法もあります。初めは「感想を言い合う会」くらいのスタイルからでも、ぜひ取り入れてみて欲しいと思います。

大会は大きな学びのチャンス

現在、様々な軽音楽部向けの大会が各地で開催されています。大会は、練習の成果を発揮するための場としてだけではなく、考え次第でさらに有意義なものとなります。出場するのは予選を勝ち進んできた優秀なバンドたちばかりで、しかも学内の演奏会とは違った緊張感がある真剣勝負です。そんなステージをよく観察することが何よりも大きな成長につながります。良いところは参考にし、反面教師として捉えるところは捉え、まさに「人の振り見て…」が実践できる場です。さらに、演奏したバンドへの審査員の講評と自分の感想との違いを比べてみ

たり、アドバイスを自分たちに置き換えて聞いて今後の参考にすることもできます。大会は、音楽的にも人間的にも大切な学びの場です。単なる優劣を競う場としてしまうのはもったいないことです。初心者の中には、他バンドの演奏を見たり聴いたりしても、テクニックばかりが気になってしまいかもしれませんが、本当に見て欲しいのは、各々が持つテクニックをどのようにしてアンサンブルに活かしているかという部分です。バンドというチームで演奏する時には「1人ではない」「このメロディとデモリットがあります。当たり前だと思われるかもしれませんが、チームでの演奏やパフォーマンスは、メンバー同士で助け合い、おぎなひ合うことで「1+1=2」以上のものになります。しかし、その反面、複数人で合奏する難しさも同時にあります。そう、そういった部分の比較・分析ができ、言葉として感想や批評を言えるようになることが目標です。

パートごとの批評ポイントの例

ボーカリスト

- ・発声や滑舌は良く、歌詞が聴きやすいか
- ・楽曲に合った強弱や抑揚か
- ・他のパートとのリズムやテンポ感
- ・楽曲と合ったステージングや表情か
- ・歌詞の世界観をイメージできているか
- ・マイクの使い方
- ・ピッチ（音程）の安定

ギタリスト

- ・音量、音色は楽曲や演奏に対して適切か
- ・リズムはドラム、ベースと合っているか
- ・音のバックアップ時とソロ時などの切り替え
- ・他の楽器との音のマッチング
- ・チューニング
- ・スムーズな機材セッティングだったか
- ・ソロなどのステージングは考えられていたか

ベーシスト

- ・バンドに馴染むベースらしい音作りか
- ・ドラムとのグルーヴの相性
- ・ベースラインの作り方や理解
- ・コードの和音構成や調性の理解
- ・スムーズな機材セッティングだったか
- ・チューニング

ドラマー

- ・テンポの安定
- ・アレンジに合ったダイナミクスだったか
- ・楽曲に合ったグルーヴだったか
- ・楽曲に合ったサウンド（主にスネア）か
- ・リズムパターンとフィルインのバランス
- ・セッティングは迅速だったか

キーボーディスト

- ・バックアップのリズムは良かったか
- ・ボーカルをよく聴いて感情表現していたか
- ・音量、音色は楽曲や演奏に対して適切か
- ・音色チェンジはスムーズか
- ・演奏のための事前「仕込み」は十分だったか
- ・スムーズな機材セッティングだったか

その他

- ・コーラス
- ・表現力
- ・演奏の始めと終わり方

大会での演奏のチェックポイント

普段の練習とライブ本番とは、会場やステージの広さ、音響機材の仕様、共鳴、使用機材などの環境が異なるため、演奏者にとってもいつもと同一ような聴こえ方にはなりません。広いステージに慣れていれば予測して音作りを行っておくこともできますが、どちらにしても当日の



微調整は必要です。普段からバンド全体のサウンドを意識していれば、どんな状況でもバランスの取れた演奏にすることが出来ます。トータルで「良い音」かは最も大事なチェック項目です。他にも、例えばギターソロやキーボードリフなどを、セクションによって音色や音量のバランスを変えているかなどもアンサンブルにとって大事なポイントです。

ドラムとベースは「リズム隊」と呼ばれ合奏やグルーブの土台となりますが、バンドのグルーブはドラムとベースだけで作るものではありません。メンバーそれぞれが良いリズムで演奏できていることに加え、最終的にリズム隊によって作り出されているグルーブの土台の上に他のパートがどんなリズムで乗っているかがバンドの個性となります。各パートが自分のやることをしっかりと行いつつ、どこかで他のメンバーのことも常に感じている必要がありませ

ん。リズムアンサンブルについても、バンド演奏を批評する上で着目すべきポイントです。

また、合奏でもステージングでも「一体感」がキーワードです。メンバー全員が一丸となって世界を作り上げているかが重要です。一体感を出すには、普段の練習のうちからメンバー同士で良いチームワーク作りをしておかなくてはなりません。演奏する楽曲の歌詞を全員が理解し、どう感情的にダイナミクスをつけて演奏しているのか、表現しようとしていることは伝わったか、見た目やパフォーマンスにも一体感があつたか、ボーカリストの表情や目線の位置、演奏中のアイコンタクト：などを含め、「全員」で演奏しているかがライブの最も大事なチェック項目です。

大会の動画を見る

部活動で最も大事なものは、チャレンジすることとそのプロセスです。大会やコンテストは貴重な経験の場となります。機会があれば結果を恐れずどんどんエントリーして欲しいと思います。また、自分自身は出場しなくても、先輩や同級生、他校他県のバンドを見に可能な限り会場に足を運んでもらいたいです。百聞は一見に如かず。批評する力をつけるには、自分の目と耳



で体感することほど近道はありません。軽音楽部は、まだマスコミに取り上げられることも少なく、大会の現状や出演する高校生の活躍や気持ちを知る機会は多くありません。当協会が主催する大会では、YouTubeで全バンドの演奏動画を閲覧することができます。録画は、会場の熱気そのままに：というわけにはいきませんが、学べることはたくさんあると思います。全体ミーティングで動画を全員で見、感想を言い合うといった会を開くのも有効だと思います。

文・辻 伸介

シン軽音楽部

正解のない時代に主体的な学びを促す芸術文化系部活動

多様な才能を育む 評価基準とは…

「VUCA*の時代」と呼ばれるこれからの社会においては、過去の成功体験や常識が通用しないことが多く、予測不可能な変化へ柔軟に対応することが求められます。これは学校教育の現場や、部活動においても同様です。生徒たちの成長を促し、多様な才能を引き出すためには、柔軟で多角的な評価システムが不可欠です。本稿では、軽音楽部を例にVUCAの時代に求められる新しい部活動の形、「シン軽音楽部」の評価基準を探ります。

従来の評価基準の限界と新たな視点

部活動は学校教育の一環として、生徒の人間の成長を促すことを目的としています。楽器演奏の技術向上も重要ですが、それ以上に協調性や責任感、コミュニケーション能力など、社会で生きていく上で必要な力を養うことが求められます。従来の軽音楽部におけるコンテストでは、演奏技術や楽曲の難易度などが主な評価基準となってきました。しかし、これらの基準は必ずしも生徒の成長や音楽の楽しさを測るものではありません。また、文化や芸術に優劣を付けること自体がナンセン

スであるという意見も根強く存在します。コンテストでの勝敗に一喜一憂するのではなく、部活動全体で成長できるような環境を整えることが重要です。

吹奏楽や合唱、美術や写真など、他の文化・芸術系の部活動におけるコンテストの審査基準を比較検討することは、軽音楽部の評価基準を考える上で重要なヒントになります。もしかすると、同じ問題を抱えているかもしれません。他の文化部活動との共通点や相違点を分析することで、軽音楽部独自の評価基準を生み出すことも十分に考えられます。

また、ICTを活用することで、より客観的で多角的な評価ができるようになります。スマートフォンのアプリを利用して、観客が演奏をリアルタイムで評価し、その結果を総合的に集計する方法も考えられるでしょう。この方法であれば、多くの人の意見を反映することができ、より客観的な評価が可能になるほか、SNSを活用して、演奏動画を公開し、一般の人々からの意見を募ることも考えられます。

文化部における評価基準の可能性

「シン軽音楽部」では、単に演奏技術の優劣を競ったり、楽曲を演奏するだけでなく、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力、創造性など、多岐にわたる能力を養う場となります。また、音楽やバンド活動を通して、生徒たちが社会とのつながりを深め、自己実現を果たすことができる場としても期待されます。

多様な評価基準…演奏技術だけでなく、楽曲の選曲やステージング、観客との一体感、さらには、部員一人ひとりの成長や部全体の協力体制など、多角的な視点から評価します。

全員参加型のステージ…ステージに立つのは一部のメンバーだけではなく、全員が役割を持ち、協力してステージを作り上げるために、司会や照明、舞台補助などの役割も評価に加えることで、全員が主体的に参加できます。

観客参加型…観客が審査に参加することで、よりエンターテインメント性が高まり、生徒たちのモチベーションの向上にもつながります。

ICT活用…スマートフォンアプリやSNSを活用することで手軽に評価を行い、結果を共有することができます。

シン軽音楽部は生徒の成長を促す場

軽音楽部は従来の枠に囚われず、新しい価値観や技術を取り入れることで、生徒たちの成長を促す場へと進化することができます。シン軽音楽部は音楽を通じて、生徒たちが自己実現を果たし、社会

に貢献できる人材へと成長するための素晴らしい機会を提供してくれます。

特に芸術文化系部活動は運動部と異なり、絶対で客観的な評価基準が存在しないので、多様な表現を認め、評価することが可能です。この多様性を尊重することで、生徒一人ひとりの個性や才能を伸ばし、自己肯定感を高めることにつながります。このことを踏まえ、生徒たちの創造性を尊重し、それぞれが持つ個性を最大限に引き出すような新しい評価システムを構築することが重要です。

文・三谷佳之



VUCA (ブーカ): Volatility (変動性)、Uncertainty (不確実性)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (曖昧性)の頭文字を取った言葉で、現代社会が複雑化し、不確実性が高まっていることを意味します。

RECORDING
ENGINEER

MUSICIAN

VOCALIST



Be The Real Thing

CONCERT
STAFF

DANCER



コンサート・イベント科 職業実践専門課程

- コンサート制作コース ●コンサートPAコース ●コンサート照明コース
- コンサート舞台コース ●イベント企画コース

ミュージックアーティスト科 職業実践専門課程

- サウンドクリエイターコース ●プレイヤーコース ●ヴォーカリストコース

音響芸術科 職業実践専門課程

- レコーディングエンジニア専攻 ●MAエンジニア専攻 ●ラジオスタッフ専攻

ダンスパフォーマンス科 職業実践専門課程(蒲田校のみ)

- プロダンサー専攻 ●バックダンサー専攻 ●ダンス&ヴォーカル専攻
- コレオグラファー(振り付け)専攻 ●ダンスインストラクター専攻
- テーマパークダンサー専攻

オープンキャンパス+体験入学

7/25(土)・26(日) 8/1(土)・2(日)

8/15(土)・16(日)・23(日)・30(日)

以降順次開催

軽音楽部への部活支援を行っています!

若きつくりびとへ。

日本工学院

www.neec.ac.jp

日本工学院専門学校

〒144-8655 東京都大田区西蒲田5-23-22 ☎0120-123-351

日本工学院八王子専門学校

〒192-0983 東京都八王子市片倉町1404-1 ☎0120-444-700

総合型選抜(AO入学)
エントリー受付中!

アーティスト



日本工学院専門学校/日本工学院八王子専門学校

音楽を一生続けていく
ために大切なこと

音楽やエンターテインメントにまつわる職業や業界は多岐に渡りますが、一体どんな世界なのでしょう。今回はアーティスト活動続ける上での「アーティスト・デュアルキャリア」の重要性について、日本工学院専門学校ミュージックカレッジ ミュージックアーティスト科の志鎌克彦先生に伺いました。

様々なアーティストが日々情報を発信し、活動していますが、YouTube や SNS が隆盛している現代において、大切なポイントを教えてください

志鎌: ステージでパフォーマンスをするのと同じで、「魅力的なコンテンツを発信し続ける」ということを心がけることが大切です。自分が出したコンテンツの先には、それを受け取る人たちがいて、その人たちがどう思うのかを常に考えて、発信をする…。そこにまで気を遣える人たちのコンテンツが生き残っていくのだと思います。

大切なポイントは、まずは好きなことをやってみることです。自分が「良い」と思ったことをやってみて、「違うな…」と思ったら修正する。トライ&エラーの繰り返しだと思います。たとえば、なかなか結果が出なかったとしても、日々修正を加えていき、受け取る側の人たちが幸せになれたり、喜んでもらうために、常にブラッシュアップを心がけたいですね。それが「自己プロデュース」につながるとしています。

あとは、好きなことを真似ることから始まると思うので、写真の撮り方から服装から、発信の仕方まで、まずは真似をしてみて、それが自分にフィットするか、しないかです。フィットしたら続けるべきだし、違うと感じたら変えるべきで…。まずは、真似をすることが大切だと思います。

— 昨今「デュアルキャリア」というワードを耳にすることが多くなりました。メリットや注目されている要因は、どのあたりにあるのでしょうか?

志鎌: これまでは「音楽は芸の道だから、それに集中しなさい」という考え方が主流だったと思うのですが、「実は、そうじゃないんじゃない?」というのが「アーティスト・デュアルキャ

リア」の考え方です。「音楽を一生続けていくために、仕事もしっかりやる」という考え方で。例えば、年相応な平均年収を稼いでいれば、家賃が払えて、おいしいご飯も食べられて、おしゃれもできて、彼女や彼氏とのデートもできるわけですね。

アスリートの世界に目を向けてみると、スポーツの世界ではアスリートの第二の人生を充実させるための「アスリート・デュアルキャリア」の情報をたくさん見つけることができます。アスリートの世界はとても厳しくて、競技にもよりますが、25歳で現役の区切りをつけるケースが多いようです。

また、興味深いレポートがあって、トップアスリートが一番不安に思っていることは「収入」ということでした。十分に「強化費」が買えない場合は自己財源を切り崩していくことになり、親族からの支援も必要になってくる。バックアップ体制があるアスリートと、そうでないアスリートでは、レース前から結果が出てしまいますよね。「在学中にコーチから『卒業後、仕事はどうするんだ?』と一言でも言って欲しかった」というコメントがあったことに、僕は衝撃を受けたんです。そういう不安を払拭するために、人生の早い段階で仕事を意識することはプラスに働くのだと思います。それは芸術家やアーティストも同じだと考えています。

ただ、僕たちの世界は「アーティスト」なので、「アスリート」のように活動期限があるわけではありません。一生音楽を磨き続けていけるわけで…。「アーティスト活動」とは「音楽と仕事の『二刀流』の活動」である、と胸を張って言える世の中を10年後に創る! というミッションを達成するため、本校では今年度から啓蒙活動をスタートさせたところです。音楽も人生、大事な2つ、どちらも犠牲にしないということですね。

— 最後に、音楽やエンターテインメントの世界で活動したいと考えている高校生にメッセージをお願いします

志鎌: 音楽の世界だけでなく、どの業界にも通じることですが、やはり「挨拶」「時間を守る」「人を裏切らない」「謙虚である」…これだけは忘れてはいけないし、この4つをしっかりやれば生きていけると思います。これらの要素がないと、いくら美人でも、いくらスタイルが良くても、いくら歌やギターが上手でも、絶対に長続きはしないので、「人間的にしっかりとしましょう」と伝えたいですね。

守れていなくても、何とかやっていけるのは若い時だけです。「若さ」という期間限定のとてもつらい輝きが消えた時、これらのことができていない人たちはいなくなります。ただし、若いうちは「若さ」をトップ・プライオリティに持ってきた方が良いと思います。若い人たちは若さを売りにするべき、それにプラスして、自分から積極的に挨拶をしたり、約束の時間を守ったり、謙虚な姿勢を併せ持つておくと、入れ替わりの激しい世界でも生き残っていけるのではないのでしょうか。それから、未成年のうちは両親や家族とのコミュニケーションもしっかりと取って、アドバイスをできるようにして欲しいですね。



▲音楽を一生続けるために「二刀流」を応援します
(写真: 左から 志鎌先生、多田先生)

NPO法人
全国学校
軽音楽部
協会



活動のヒントに生きた教材を！
出場バンドの演奏映像から学びませんか？

2020年から最新の春大会（2026年）まで、当協会の主催大会に出場した738バンドの演奏映像を公開中です。校外の、なおかつ大会参加レベルの他校の演奏から学べる機会は、なかなかありません。部全体の意識向上をはじめ、個人の感性を磨く機会として、他校の技術力や表現の深みを学び、自校の活動の参考にご活用ください。

第8回

高等学校
軽音楽コンテスト
関東大会

22 バンド



第11回

高等学校
軽音楽コンテスト
関西大会

22 バンド



第13回

高等学校
軽音楽コンテスト
中部大会

22 バンド



Pop & Rock Music,
Jazz

昭和音楽大学 | 昭和音楽大学短期大学部
ポップ&ロックミュージックコース / ジャズコース

オープンキャンパス

昭和音大を体感してみよう！

7/12 Sun 8/3 Mon 他

★＝対面のみ実施、学生によるミニライブ鑑賞あり

夏期講習会

受験生受講率No.1!! 夏休みにレベルアップ

8/1 Sat ~ 4 Tue

- 実技個人レッスン
- ポピュラー音楽理論
- DTM講座 他

受験講習会

個人レッスンでプロの技を身につけよう！

8/29 Sat 9/26 Sat 他

- 実技個人レッスン
- ポピュラー音楽理論
- DTM基礎講座 他

アンサンブルセミナー

本学教員がアドバイス!!
ジャムセッションを楽しもう。

9/26 Sat 10/24 Sat 他

受験対策スクール
"パスウェイズ"
Pathways

無料体験レッスン受付中！

音大受験生に対し、
本学の講師陣が継続的に
レッスンをを行います。
オンラインも可能です。

[対象：高校生（既卒者含む）、中学生]

昭和音楽大学附属クリエイティブスクール
CREATOR SCHOOL

小中高生のための
音楽クリエイター育成スクール

新規開校!

▶ 日程や内容は変更となる場合がありますので、詳細や最新情報はウェブサイトをご覧ください。◀



お申込・
詳細は
ウェブで!

お問い合わせ / 広報室

0120-86-6606

nyushi@tosei-showa-music.ac.jp

〒215-8558 神奈川県川崎市麻生区上麻生1-11-1

オンライン個別相談、実施中! 平日11:00~18:00

本学教員・進学アドバイザーが質問にお答えします。(1回30分程度)

◎希望日の3日前までにお申込ください。

